

もう一人のあなたがいる

平和統一 NEWS 53 号 (2013/2 月号)

渡辺 久義

私は2月10日に「集団的覚醒、意識革命、アセンション」という題で話をする事になっているが、このアセンション(訳せば、次元上昇)という問題について、今、世界で一番信頼されかつ敬愛されているのは、David Wilcock ではないかと思う。我々のサイト(創造デザイン学会、www.dcsociety.org)でも、この人の文章を最も多く翻訳紹介している。そのウィルコックが、「2012年12月21日：ロマンスと現実」という最新の論文でこう言っている

チベットとインドだけでも、すでに「レインボウ体」(Rainbow Body)に変身したという人々の、18万以上の記録された例がある。この現象はずっと続いて現在に至っている。...これはカトリック僧である Tiso や、最近では中国軍の隊員たちによって、目撃され、精査され、研究されている。これらの例のそれぞれにおいて、生身の人間が Light Body (光る身体)に変形され、この肉体世界とあの世とを行き来する能力を得ているのである。いくつかの例では、人々は突如として、自然に変身することもある。しかし多くの場合、彼らの身体は、ある帷子(かたびら)に包まれたような状態で、数日をかけて、徐々に純粋な虹の光へと移行する。

こうした人々は例外なく、高度に進んだ霊的訓練を続けてきた人たちである。彼らに起こったことに「偶然的」なものは何もない。彼らは瞑想し観想し、自分自身と他者を愛し、許し、受け入れそして宇宙と、本来のより大きな自分自身を、一人の無限の創造者として見る最善の努力をしてきたのだ。

この最後の文章に注目していただきたい。「自分自身と他者を愛し、許し、受け入れ」というところから、「ホ・オポノポノ」とハワイ語で言われる、人間的・社会的な霊的治癒の方法を思い出す人があるかもしれない。これは、Thank you, I love you, I am sorry, Please forgive me という4つの言葉を毎日、繰り返し唱えるだけで、人間関係や心の病気などが、目に見えて改善されていくと言われているものである。

なるほど、それは確かに効果があるかもしれない、と素直に受け入れる人は多いであろう。しかしこれは他者に対して言うだけなのだろうか？ 私はそうは思わない。「ありがとう」「愛しています」はともかく、「すみません」「どうぞ許して下さい」を他者、あるいは他者と神に向かって言い続けると、どうなるだろうか？ それは、「私はどうしようも

ない罪人です、悪人です」という卑屈な根性を生み出す可能性があるだろう。それは偽善にも偽善にもなるだろう。もしそうならば、明らかにマイナス効果となる。ニーチェなどは、キリスト教のそういうところを突いて、これを奴隷の宗教として弾劾したのだった。

ウィルコックはここで「自分自身と他者を愛し、許し、受け入れ」と言っている。しかも「自分自身」を先にしている。私はこの何気ない短い文の中に、この人の人格の高さを支えている優れた哲学を見出す。そしてこの哲学にこそ、今この時期 すなわち集団アセンションが間近に迫っているとされるこの時期 我々の運命のすべてが懸っていると思う。

我々はまず、自分自身に対してこの4つの言葉を言わなければならない。なぜなら、あなたは、宇宙と一体となるような「本来のより大きなあなた自身」でもあるからである。これは傲慢とは全く違うものだ。むしろ傲慢の正反対のものである。我々はまず、自分自身を尊敬できなければならない。それが基本にななければならない。それがないところで他者への尊敬や愛などと言っても、それは偽物である。

彼は別のところで、「より高い自己」とも言っている。つまり、我々は一人ひとり例外なく、常にもう一人の「より高い自己」と二人連れだということである。アセンションを促しているものが何であるにせよ、それはもちろん、この本来のより高い、もう一人の自己に対する呼びかけである。日本でウィルコックのような啓蒙運動をしているエハン・デラヴィという人がいるが、この人は、今、すべての人に「ドッベルゲンガー」(自己の分身)がついている、と言っていた。同じ意味であろう。

我々は自分が何者であるかを、いい加減に悟らなければならない。どたん場になって「それは知りませんでした」では済まされない。ところが我々の社会体制は、最後の最後まで「それは知りませんでした」と我々に言わせようとしている。あのダーウィン進化論を批判する運動に対する、狂気じみた敵意と悪意を見ればわかるだろう。そして、アセンションを阻止するために、人間を動物状態に留めおこうとするこの愚民政策を、背後で操る者がいることに気付かなければならない。

我々は、本来のより高い自分自身に、「申し訳ありませんでした」と謝らねばならない。私は誰かが、昔の強く怖い親父のように、私自身を含めた全人類を組伏せ、馬乗りになって、その額を畳に押し付け、「さあ謝れ、謝れ お前自身に対して謝れ」と言っている姿を空想する。そのとき人類がハッとして悟るか、意味がわからずキョトンとするかに、我々の運命がかかっている。もしすべての人がそのとき悟ることができれば、その瞬間から「黄金時代」は始まると思う。